

野菜研究室ダイアリー

2025 年 7 月



○夏は後片付けの季節です

私たちの研究室では、野菜の施設栽培の新技术開発と品種育成の研究を実施しています。愛知県の野菜の施設栽培は、夏の終わりに秋にかけて苗を植え、冬を越えて翌年の春～初夏まで栽培する作型(栽培体系)が主体です。試験研究も現場の作型に合わせて実施するため、6～7月は栽培が終了し、後片付けに追われています。



トマト栽培施設の後片付けの様子(株を取り外して搬出)

何か月も育ててきた株は思いのほか大きくなっており、後片付けは重労働です。事故や熱中症に見舞われないよう注意しながら、力を合わせてやりきりました。

○後片付けが終わったら、さっそく次作の準備！

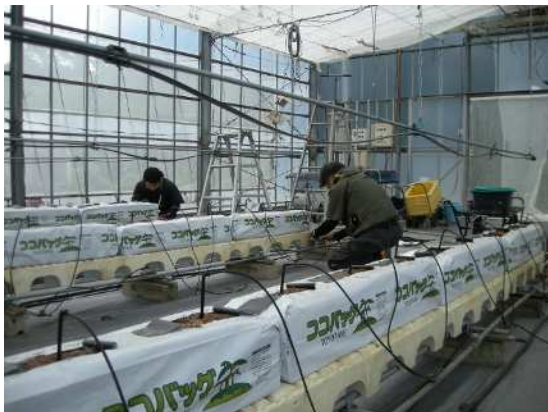
後片付けが終わったほ場は、次の作付けに向けた整備に取りかかります。土の消毒、余分な肥料分を取り除くためのソルゴー栽培、栽培ベッドの改良など、やることは盛りだくさん。



マルチやかん水チューブを取り外し(左)、蒸気の熱で土を消毒(右)



土をきれいにするソルゴー栽培の様子



やしらがら栽培ベッドの改良作業(半円状ワイヤーメッシュ取り付け)

○もちろん、タネまきや苗づくりも着々と進めます



大切にタネをまき(左)、空調環境の人工光育苗装置で発芽(右)



イチゴの採苗作業の様子



発芽間もない苗(左：ナス、右：イチゴ)

これらの仕事が研究室で始まっているということは、農家の方々のところでも仕事が本格化しているということです。2024年度は厳しい残暑の影響で、愛知県内の施設野菜栽培農家は大変なご苦勞をされました。連日の猛暑が身体に堪える中で働いていると、事態の深刻さが強く実感されます。



中央研究棟前のバラストの中にも…



U字溝の中にも…



ヘクソカズラと一緒に
イヌツゲの生け垣を浸食

場内のあちらこちらに、アカメガシワというトウダイグサ科の雑木(ざつぼく)が生えています。鳥が種子をばらまき、いろいろなところで芽を出します。最初は「雑草かな？」と油断させておいて、あっという間に大きくなります。

典型的なパイオニアプランツ(山火事の直後などに他に先駆けて芽吹く植物)とされ、造成地や耕作放棄地などでもよく見られます。そのうち場内がアカメガシワに乘っ取られてしまうのでは？と、ちょっと心配です。



愛知県農業総合試験場 園芸研究部 野菜研究室